

模擬授業研究会の斉藤メモ(2019年11月20日)

授業者：〇〇

範囲：財政

主な感想・代案

- 語り掛ける独特の雰囲気、生徒を引き付ける魅力を感じました。ただ、前提として学習指導案の作り方が甘いように感じます。本時の展開に関しても雑に感じます。この点に関しては、サポーターにも指摘してほしかった。ワークシートのビジュアル面に関して、もっと工夫が出来た気がします。
- 導入の流れが授業の内容と一致していない点については、感想が集中しているので言及しません。
- この授業のあり方を考える上で、一つ皆に聞きたいのは、「世の中で、多額の税金がとられること、消費税が増えることに対して、納得している大人がどれくらいいるだろうか？」という点です。無政府主義や夜警国家を支持するでもしない限り、税金の役割を全否定する人はいないと思います。ただ、それをだれに支払わせるか？誰に負担させるかという話になると、どろどろした言い争いになるのが世の常です。そういったことを授業者が意識しているのかというと、やや楽観的というか、建前の捉えているような気がします。生徒にどこまで考えさせるかは別に、その点を強く念頭の置く必要があると思います。
- この授業は知識理解を重視していることもあり、税制をめぐる論争性を真正面から扱うものではない。そのことは、本授業の学習課題(主発問・目あて)などからも分かります。ただ、授業で用意した発問がどのように組み立てられて、教科書ページの内容を教えようとしているのか、その構造がイメージ読み取れない印象がありました。結果として、累進課税制度のところ、非常に道徳的に教えられているような感じが否めない。地方税と国税の違いについても、真正面から問う問いが無い。
⇒ 私であれば、主発問を「なぜ税金の種類はこんなにもたくさんあるのか？——こんなにたくさんいるのか？——」とします。導入では、税金ってそもそもいるの？というところを考えさせたいので、税金がなかったらどうなるかという思考実験をする。道路が荒れたり、めったに使わない道にある交通信号のために誰がお金を払いたいと思うかなど。例はほかでもいいたかもしれません。で、導入の終わりに、税金のリストを列挙した資料を見せて、なぜこんなに複雑なの？多岐に及ぶの？というところに疑問を持たせる。だれにとっても必要な税金ははずなのに？と。
⇒ 展開部分の柱となる問いは「なぜ国税と地方税が分かれているのか？」「税金の仕組みをめぐって、なぜ大人はいつも揉めているのか？」の二本柱にします。一つ目の話は全部国で統一すればいいじゃんという素朴な疑問から、なぜ地方ごとに税制を分けているのかを考えさせます(生徒が議論するというよりも、考えさせる間を設けるイメージ)。二つ目の問いは、国会や新聞などで税制の仕組みをめぐって論争している政治家の写真を見せて印象付け、税制の仕組みが経済所得や平等性の問題と絡むことを大まかに理解させます。

【コラム】理論と実践の接点

授業で何を教えるかという中核内容を考えることが重要であることは、以前にもこのクラスで共有したと思います。ただ同時に、その中核内容を抑えるために、どのような順序で何を教えるべきか？という構造の問題が重要になります。社会科研究では、これを「知識の構造図」といったり、それと対応する「問の構造図」といったりします。授業のメインの問いに対して、構造化できていない問いを展開で連発すると、構造上の説明がしにくくなり、結果として何を学ぶ時間なのかが不明確になる可能性があります。この点に関して、〇〇君の授業は構造化が不十分だったように思います。

【参考文献】岡崎誠司『見方考え方を成長させる社会科授業の創造』

模擬授業研究会の斉藤メモ(2019年11月20日)

授業者：〇〇

範囲：エネルギー政策

主な感想・代案

- - 流石の貫禄がありました。ワークシートや教材準備にかかる熱意も伝わってきます。チェックシートの工夫も、これを準備している熱意自体が良いなあと思います。
 - 前時にエネルギー事情について扱っていることを踏まえつつ、本時での楽しく復習や自分の価値観を振り返る作業をして、発展的な課題へと向き合おうとしていることが分かります。また、展開部での課題に関しても、経済、安全、便利さなどを視点として掲げて考えさせようとするなど、いわゆる「多面的・多角的」に考えさせようとする意図が強くみられます。
 - 展開部最初のグラフの読み取りに関しては、感想が集中しているので触れません。
 - 私がこの授業を見て思うのは、生徒が悩む場面は本当にこの授業であるのだろうか？という点です。エネルギー問題は、何となく建前的な理想論も見え隠れし、教師に答えてほしい答えが生徒側からしても見えやすい問題だと思えます。教師は生徒が一生涯懸命考えてくれていると思っていても、生徒からすると、それは単なる顔色伺いゲームやパズルゲームになる恐れもある。だから、本当に生徒の本音を引き出すような工夫がもっと欲しいと思いました。
 - 確かに後半のグループワークや発表のワークシートの作り方などは、最近見る研究授業の典型のような出来栄えだと思えます（これは褒めています）。ただ、だからこそ、なんだかパッケージ化されたような印象を受けます。〇〇さんのこだわりが見えにくい。
- 私なら、〇〇さんが挙げた「経済」「安全」「便利さ」を三角形のチャート図にして、どれが一番大事か？という点から各政策を徹底的に考えさせる工夫をします。あらかじめ、政策を選ぶ前に、チャート図に色塗りをさせ、各政策を三角形のチャート図に従って分析し、その上でどの政策が「まし」かを優先順位をつけさせます。要は、三つの視点への生徒のこだわりを強調したいのです。生徒同士の議論をする際にも、下手にグループワークにすると個人の意見がつぶされるので、「経済」「安全」「便利さ」のどれを優先している人にとっても不安になるような情報を提示して、本当にそれでいいのかを問い、生徒同士で、お互いの優先軸と選んだ政策について議論させます。同時に、「モヤモヤしている点」などを共有してもいい。そうやって議論をした後で、自分の意見が変わったかを振り返る。そういった展開にする方が、生徒自身が自分の答えと向き合う授業になるような気がします。

【コラム】理論と実践の接点

アクティブラーニング旋風が世の中に吹き荒れる中、生徒が何かを提案したり、生徒が互いの意見を交換する授業が「対話的」と考えられる傾向にあります。ですが、それは本当に自分の考えと向き合った結果の決断なのか？と問われると、多くの実践は他者との形式的な対話を優先し、自分自身の価値観を吟味する過程がおろそかになっている。そういう傾向もあるような気がします。例えば王子(2018)では、生徒は往々に社会問題の意思決定をする際に、「あらかじめ」意見が決まっていた、その後付けをしているに過ぎないということを論じています。問題はそのあらかじめ決まっていた意見をどう吟味させるか。そこが重要になります。自分が優先した価値を吟味するためには、他の何を犠牲にしてそれを優先しているのか？自分が選んだ価値観は誰にとっての利益につながるのか？などを考えさせる必要があるように思います。

【参考文献】王子明紀「直感のバイアスの制御に着目した社会科意思決定学習法の開発」『社会科学研究』第89号, pp.13-24.